氏　　名	NAHED ALMEREE
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　９３５８　号
学位授与年月日	令和２年３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	大正期の童謡研究―金子みすゞの位置づけ―
主　　査	筑波大学　教　授　　博士（文学）　　青柳　悦子
副　　査	筑波大学　教　授　　博士（学術）　　加藤　百合
副　　査	筑波大学　准教授　　博士（文学）　　吉原　ゆかり
副　　査	立命館大学大学院文学研究科 教　授　　Ph.D.（人文学）　鵜野　祐介

論　文　の　要　旨

本研究は大正期に隆盛をみた童謡運動のなかから誕生した投稿童謡詩人金子みすゞ（1903-1930）に着目して、大正期の童謡を捉え直そうとする試みである。史的な系譜や理論の変遷についての研究の蓄積はあるものの、詳細な分析に乏しい童謡分野の研究を補うべく、大正期童謡運動の成立背景、そのなかでの異なる童謡観の対立、作品にみられる特徴と主要なテーマなどを、とくに北原白秋と西條八十を中心に明らかにしていく。そしてこの童謡運動のなかから誕生してきた金子みすゞが、これらの童謡界の巨星たちとどのような関係にあったのかを作品分析を通じて明らかにするとともに、みすゞ固有の特徴が何であったのかを探究する。

論文は以下の構成をとる。

序章
第１章　大正期の童謡運動とその背景
第２章　大正期童謡における「芸術性」をめぐって
第３章　大正期童謡の先駆としての「唱歌」
第４章　童謡詩人金子みすゞの生涯と作品
第５章　西條八十からの影響と金子みすゞの独自性――時空間の展開
第６章　北原白秋からの影響と金子みすゞの独自性――新しい受容の体験と認識の多様化
第７章　童謡詩人金子みすゞの歩みと作品の特徴
終章　大正期の童謡とみすゞの位置づけ

序章では、大正期童謡および金子みすゞをめぐる研究の現状を概観し、先行研究の主な論点を確認する。とりわけ、同時代には投稿詩人として高い注目を浴びていたみすゞが死後忘れ去られ、矢崎節夫の尽力によって

1980 年代に「復活」するまでの経緯とそれ以後のみすゞブームについて概括する。さらに本研究の課題として、みすゞを同時代状況に置いて影響関係や作品の意義を探ること、詳細な作品分析をおこなうこと、投稿者たちの重視などの新たな観点から大正期童謡を再検討すること、などを述べる。

第 1 章では大正期の経済発展と消費文化の拡張のなかで、児童文化の重視と自由主義的な教育改革運動が進行していたことを確認し、そうした背景のもと 1918（大正 7）年の『赤い鳥』創刊によって始まる大正期童謡運動を概観する。この運動のなかで活躍した詩人たち（白秋、八十のほか、三木露風、野口雨情、山村暮鳥など）の動向をまとめるとともに、児童文芸雑誌の童謡欄への投稿者たちに注目し、若者および児童たちによる活発な投稿活動の状況とその主要な特徴について論述する。

第 2 章では、とりわけ童謡の「芸術性」をめぐって繰り広げられた、白秋と八十の対立について論じる。まず、『赤い鳥』を創刊した鈴木三重吉が提唱した「芸術童謡」の概念を鍵にして、白秋と八十の童謡観を明確化する。さらに作品分析をおこないながら、大人としての作者の感性や人生の観照を童謡に取り入れ抒情的に表現したのが八十であり、当時はまさにそれが「芸術」的だと評価されていたこと、一方白秋は「童心」を重んじ、平易な語彙を用いて直感的な要素をうたうとともに、翻訳童謡においても創作童謡においてもユーモアやナンセンスを重視していたことを明らかにする。

第 3 章では、大正期童謡とは対極的なものと捉えられがちな明治期の学校「唱歌」の伝統を再検討し、文部省による最初の唱歌集『小学唱歌集』（1881（明治 14）年－1884（明治 17）年）以降、数々の改良の試みが「唱歌」の枠内で積み重ねられてきた過程について検証をおこなう。官製および民間の唱歌集を具体的に検証することによって、わかりやすい口語体の歌詞の採用や、子どもにとって身近な題材や子どもの感覚の重視が、大正期童謡運動の開始までにすでにおこなわれていたことを明らかにする。

第 4 章では、おもに矢崎節夫の著書『童謡詩人金子みすゞの生涯』（1993 年）に依拠してみすゞの人生の主要な出来事を押さえつつ、伝記的背景と創作傾向の関連について掘り下げる。とりわけ、近しい人々の「喪失」の経験がみすゞ作品における「見えないもの」の重視や多様な視点の獲得につながったことを論じる。また、生家が書店という文化的な家業を営んでいたことを重視し、諸々の逸話から、これまでの「薄幸な」みすゞ像を刷新するべく、知力に秀で、活発で指導力があり、意志に富んだ人物像を提示する。

第 5 章では、みすゞに最も影響を与えた詩人として知られる八十との関係を再検討することによって、みすゞ作品の独自性を探る。八十はみすゞの作品を「イマジネーションの飛躍」があるとして賞賛したが、この言葉が何を言うものであるのかを、類似したテーマを扱う八十とみすゞの作品を比較分析することで検討する。感傷性などを描写的に提示する八十と異なり、みすゞの作品には時空間の展開があり、そのなかで読み手自身の想像力を喚起する点が、みすゞの特質であり、八十が注目した点だと主張する。

第 6 章では、これまではみすゞとの関係が本格的に論じられることのなかった白秋をとりあげ、みすゞの童謡にとっての白秋の重要性について掘り起こす。みすゞが白秋の童謡に強い関心を抱いていたことを検証したうえで、「なぜ」という疑問や「不思議」の感覚をこの二人が作品にとり込んでいることを明らかにする。さらに、みすゞの作品には読み手自らの洞察を展開させるような働きがあり、みすゞは読み手に新しい受容と認識の体験をもたらしたのだと結論する。

第 7 章では、詩人としてのみすゞの歩みを描き出し、みすゞ童謡の主要なテーマと技法を改めて探り出す。そのためにみすゞが手書きで作り上げた三冊の童謡集『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』（矢崎により遺稿集として 1984 年に出版）を、作成時代順に一巻ずつ検討する。さらに「見えない」というテーマ、および入れ子構造の作品をとりあげて、相対性に重点をおいて作品の世界を作り出すことがみすゞの特徴であると指摘する。

終章では、本論文全体を振り返り、みすゞの独自性について改めて概観する。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、作品が「やさしさ」に満ちたものとして今日人気が高いものの、これまで学術的な研究が十分におこなわれてきたとは言い難い金子みすゞという童謡詩人をとりあげ、そのさまざまな特徴を詳細な作品分析を通して探り出すとともに、彼女を通して大正期に隆盛した童謡運動について改めて検討をおこない、数々の新たな側面を抉出した点で高く評価できる研究である。

金子みすゞとその他の童謡詩人たちとの関係については、みすゞをたびたび激賞し、みすゞが師と仰いでいた西條八十との関係が、これまでのところ言及されるにとどまってきた。本論文では、みすゞに対する八十の評価をもとに両者の作品を具体的に分析することを通じて、八十自身の童謡への関心のあり方と、みすゞ作品の独自性とを明示することに成功した。同様にこれまで指摘の稀であった白秋との関係についても、目を惹いた作品をみすゞが書き写した詞華集『琅玕集』での掲載数が最も多いのが白秋であることなど実証的な裏付けをおこなうとともに、作品の比較分析を展開することによって、白秋童謡とみすゞ童謡の連関性と、白秋とみすゞ、それぞれの特徴を明確化した。とくに、「マザーグース」の翻訳も含む白秋童謡の特徴としてユーモアやナンセンスの重視がみられることを指摘したのは、白秋童謡の理解にとっても、大正童謡全般の理解にとっても、大きな刺激に富む功績である。

さらに、白秋をはじめ童謡詩人たちが攻撃対象としてきたために無批判に信じられてきた明治期の学校「唱歌」と大正期の童謡との対立に疑問を投げかけ、実は、明治期における「唱歌」の改良運動の基礎の上に大正期の童謡運動を位置づけることができると立証した点は、非常に重要な貢献だと言える。

みすゞ論としては、これまで議論されたことのない、みすゞ特有の作品内でのテーマの展開や、哲学的とも言える多次元的な世界観の提示、読み手に対する強い働きかけなどを、独自の特徴として抽出することに成功した。また伝記的な情報を単にエピソードとして受け取るのではなく、そこからみすゞの積極的な人間像を探り出し、既存のみすゞイメージを覆した点も特筆すべきである。包括的なみすゞ作品の理解に基づいて、主要なテーマを的確に抽出した点も高く評価できる。

加えて、童謡運動を支えた重要な存在として投稿詩人たちに着目し、その中でみすゞを位置づけた点は大きな示唆に富む。児童による創作、学校を通じての集団的な参画、投稿を出発点に詩集を刊行するに至った男性たちの存在などはそれ自体発展性のある重要な論点であり、またみすゞ理解の更新につながる有益な指摘である。これを可能にした雑誌誌面の丹念な検討作業は、高い評価に値する。

ただし、大正期における子どもや若者の文化の多様性や、生活綴り方運動ほかのさまざまな教育実践、童謡以外の文学の動向との関連などを考慮したより広い視野からの議論と、金子みすゞの「位置づけ」についてのより明確な主張が求められるところではある。しかし、これらは今後の課題として取り組むべきもので、本論文の価値を減じるものではない。

2　最終試験

令和 2 年 1 月 26 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。